

〔隨 想〕

日本語の将来

松原秀治

日本語は将来どう云ふものになるであらうかと云ふ事が私の念頭を去らないでゐる。所謂國語問題と云ふものが甚だ不明瞭な線の上にさまよひ、漢字を廃止すると云ふ意見が、たゞ何と云ふ事なしに、進歩的(最も良い意味に於ける)であると認められてゐる様な傾向を見ると、何か不安の念が湧いて来るのは仕方ない事であらう。

漢字の廃止は日本語の将来にとって實際的な大問題である。それ故漢字の廃止を必要だとする論拠には誤りがあつてはならないものである。漢字の廃止は文字伝統の断絶と云ふ事は別にしても、日本語にとつて、たゞ単に文字を置き換へると云ふだけのものでなく、引いて日本語の語彙の重大な変更を予想するものであり、その対策がない時には、日本の文化水準の低下と云ふ様な事までが予想されるからである。

それなのに漢字を廃止すると云ふ事は、たゞ単に文字を置き換へると云ふ問題にすぎないと考へられてゐる傾向がある。そして何故文字を置き換へなければならぬかと云ふ理由は、明治初年以來至極単純な、素朴的な線に止つてゐて、其後の研究にも何等見るべきところがないと云ふよりも、研究らしいものも為されてゐないらしいのである。

我國に於て、漢字の學習が日本語を目的としないうで行はれてゐた時代があつた。四書五經の素説から始めて、支那語を習ふのに苦しんだ人々の中で、二十六文字だけ知れば文字の教育の終る西洋の事情を見て、これは便利だと思つた人のある事は想像に余りある事である。現在の漢字廃止論が、この素朴な驚をそのまゝ持ち続けてゐると云へば少し大げさかも知れないが、しかしこの驚が其後何等の検証も受けてゐないで、このあまい驚のまゝ持ち越されてゐるのは事実である。日本語に於て漢字の爲に生ずるとされる欠点、アルファベットを用ゐる外國語に於て、果して存在するかしらぬかと云ふ様な点に、今まで一顧をも与へられてゐない。片手落と云はれても仕方がないのである。

日下部重太郎氏の「國字問題」(國語科學講座七四、昭和八年、明治書院)によると、宝曆四年発行の和字大觀抄の中に、僧文雄は假名專用文の妙徳を説き、且つ分ち書きの必要も説いて居り、本居宣長も玉勝間卷十四に假名文をすゝめ、本多利明も寛政九年発行の西域物語と經世秘策とに西洋文字の便利を説き、我國でも悉く假名で書くのがよいと説いてゐる相である。この様に假名専用説は仲々古くからあつた様であるが、しかし實際的に漢字廃止が問題になつたのは、矢張り同書にある様に、前島來輔(後の名は密)が慶応二年十二月に徳川慶喜將軍に奉つた「漢字御廃止の儀」を以つて初めとする様である。さうして現在の漢字廃止論はこの前島密の系統を引いて居り、そしてそれ以上の理論的發展を示してゐない様である。今日の漢字廃止論がその理由とするところは、

- 一、漢字學習の困難、引いて國民知識水準の低下。
- 二、漢字の爲に同音異義語が発生すること。

三、国民の中に漢字を知る階級と漢字を知らない階級が生じ、二本建の文化が生じること。

の三点にあるが、この論拠は先にも云った様に少しも深く掘下げられてゐない。

漢字学習の困難は、初等教育に影響し、我国の小学校六年間の読本の材料を独逸あたりの小学校の同年限の読本の材料に較べると、僅かに六分の一位しかないと云ふ説が広く行はれてゐる。この説は漢字廃止論の色々の著書に述べられてゐるもので、保科孝一氏の世界小学教育第一篇、世界国語読本概説が元である様に思はれるが、私が調べたところとして国語問題といふ重大な問題では大変な誇張である。斯う云ふ誇張した不正確な説を土台に論じられては全くたまつたものではない。

次にこの結果として、西洋諸国では一年半で読み書きは卒業してしまふから、尋常三年生以上では、本を読むことゝ話を聞くこととの間に、むづかしさの違ひは殆ど存立しないと云ふ説がある。これも所謂俗耳に入り易い説であるが間違である。

漢字廃止論に於ては、表音文字の価値を不当に高く評価してゐる。しかしよく調べてみると、綴を一つ一つ拾つて音を発音する事が出来ると云ふ事と、文を読むと云ふ事は、別の事の様である。吾々は先づ我国に於ける国語教育の実際は果してどうであるかを見る必要がある。例へばコロンビア大学の教育心理学者として有名なアーサー・アイ・ゲーツの「説方に於ける興味と能力」(一九三〇年)をみれば、表音文字を用ゐる国に於ける国語教育と云ふものは、漢字廃止論で考へられてゐる様に簡単なものでない事が分る。アルファベットの様な表音文字で書かれた語と云ふものもやはりその綴全体の形が記憶されなけ

ればならないものである。アルファベットで書かれた語はやはり漢字と同じ様な全体の形として覚えられ、これを覚えるには矢張り長い時間がかかるのである。そして読書と云ふものは、それ以上に、語を一つ一つ読まないで、之を一群として把握しながら読んで行くのである。このことは読書の際に於ける眼球の動きを映画にとつて調べたシカゴ大学其他で為された研究で明である。一つ一つ綴を拾つて曲りなりに発音が出来ると云ふ事と、文を読むと云ふ事は全く別な事に属するのである。

次にもう少し大きな問題として、吾々は頭の中に音の表象が形成されなければ言語を理解出来ないものかどうかと云ふ問題がある。成程吾々の言語と云ふものは音を基礎として成立してゐる事は事実である。しかしこれは吾々の言語能力の仮現の姿で、言語能力はもっと深いところにあつて、その根本は事物を統合したり、抽象したり、捨象したりする、概念構成能力であらう。音声はこの能力を具現せしめる最も便利な手段であるから、話し言葉としてこれが使用されるのは当然であるが、既に字が出来た以上は、字はその元である音声を媒介する事なしに、ぢかに概念と結びついても好いのである。字と云ふものは一体さう云ふ人間の一つの能力と結びついて生じたものではなからうか。この問題は大変むづかしい問題であるが、失語症、失読症、失書症に現れる色々な現象には、この点について非常に面白い示唆を与へるものがある。秋元波留夫氏の「失行症一(昭和十年、金原商店発行)はこの問題に興味をもつ人々に有益な指示を与へて呉れるであらう。この本の示すところをここで詳しく述べられないのは残念であるが、とに角失語症の研究は漢字が音を離れた形象として把握されると云ふ事と、更に面

白い事にはアルファベットで書かれた文字も亦之と同じく音を離れて漢字と同じ様な性質を持つ事を暗示してゐるのである。更に之を傍証するものに草島時介氏の「感の世界」(昭和十八年)がある。これは盲人の点字読みに関する実験的研究であるが、これに於ても同じ様な結論に達してゐる。点字も亦触感が直接に概念に結びついてゐる様である。これらの事実から、吾吾は音は言語に於ける一つの手段にすぎない事を知る事が出来る。しかしこれは最も重要な手段であるから、言語に於ける音を軽視すると云ふ事は吾々には許されない事であるが、字には字としての特殊な領域があり、音の立場からのみ字を見ると云ふ事は一つの行き過ぎである。と云ふ事を知る事が出来る。つまり仮名文字、或いはローマ字書き日本文が、一寸馴ればすぐ読める様に思ふのは間違なのである。日本語を仮名文字、或いはローマ字書きにする事は可能であるが、その習得には矢張り長い時間がかかるのである。

次に同音異義語の問題は、今迄幾度も書いた事があるが、これは一種の杞憂にすぎない。勿論聞いただけで分らない語はあるが、これは極く少数で、普通の話の場合には実際的には対策や、言ひ換へが行はれてゐる。その他の普通分らないとされてゐる所謂同音異義語は、文の中では分るのである。一体単語と云ふものはその単語一つだけを単独に取り出して見てはいけなもので、あくまでそれが用ゐられてゐる文の中で見なければならぬのである。単独に取り出して見た単語の音に、どれだけか異義があらうとも、それが文の中で区別せられる限り差支へないのである。西洋の言葉にも所謂同音異義語は数多くある。日本語と同じ事である。この反証はいくらでも挙げる事が

出来る。しかしそれよりも大事な事は、これから新しく創らなければならぬ語の事である。

合成語及び造語の問題は非常に重大な問題であるに拘らず、漢字廃止論に於ては余り問題にされてゐないが、国語問題の中心はこゝにあるべきではなからうか。

一体音と意味との結びつきは偶然的なもので一種の約束であるから、吾々はみな単なる約束によって語を受入れればよい訳であるが、吾々は之とは別に語を理解しようとする必要をもつてゐる。殊に新語の場合にはさうである。それで、新しい事物、事柄を云ひ表はさうと云ふ場合には、既に知つてゐる語を組合せるか、又は分解出来る語要素を以つて新語を作る外はない。これは日本でも、西洋でも同じ事である。ここに色々問題がある。日本語に於ては将来の研究に待つところが多のである。例へば「水兵」と云ふ語の様なものである。この場合、「スイ」と云ふ様な音であれば、大体「水」を表はす事が分るのであるから、斯う云ふ音の或数を合成要素に使用するものとして設定すれば、或程度の合成語は作れるであらうが、必ずしも何時もこれが可能であると云ふわけには行かない。同音異義は普通は文脈によつて分るのであるが、新語の場合には同音の数が多いためと、未知の觀念である為に、音だけでは不十分であると思はれる。それならばどうするかと云へば、今の日本語では漢字を用ゐる外に方法はないのである。この場合漢字を用ゐる造語法が余りに容易である為に、反つて弊害があった様であるが、後から考へてみると、新語の中残るべきものは残り、亡びるべきものは亡んだ様である。そこで漢字を廃止したとすれば、造語

をどうするかと云ふ事は實際の大問題である。日本語は漢字を利用して、新語を作つて来た。さうして素朴未開な民族の言語を今日の抽象的な思考に堪へ得る言語にまで育て上げて来たのである。漢字廃止論に於ける所謂「云ひ換へ」と云ふものを見るると名詞を名詞に云ひ換へたものは殆どない様である。皆動詞性の迂遠な云ひ廻しで云ひ換へてゐる。しかし文明の言語に於て名詞は是非必要なものである。理科系の学問に於ても、文科系の学問に於ても、或事実なり觀念なりを云ひ表はす名詞がなく、どうして深い研究や發展が出来得ようか。大和言葉は今日既に造語能力を失つてしまつてゐる。これは残念ながら事実であるから仕方がない。この合成語(既成のものも含めて)及び名詞の問題については、尚色々問題があるのであるが、紙数の關係があるので、色々な問題があると云ふ事だけに止める。次の問題は所謂一本建の文化と二本建の文化と云ふ事である。

これは、漢字の存在は漢字の知識を持つ特権階級を作り、それが漢字の知識のない階級と対立すると云ふ事だ相である。つまり漢字の存在は民主的でないといふのである。しかしこの議論は妙である。もし斯う云ふ事があるとすれば、それは漢字の罪でなくて、人の罪である。原因は漢字になくて、人にあるのである。何もこれは日本だけの事ではない。畢竟教育の差であつて、西洋にもある事である。既に昔流の漢籍の知識と云ふものが問題にならない今日、日本語に必要なだけの漢字の存在をこの程度にまで誇張して、特権意識と云ふ事にまで結びつけるると云ふ事は今日では正しい事ではないと思はれる。もつともこれは廿世紀の初めに仏蘭西で綴改正運動が大問題になつた時(この運動は失敗してゐる。これは大変面白い事柄であるが、

ここでは詳しく述べてゐる暇がない)、同じ様な事が云はれた事があつて、東西対照をなして興味ある事ではあるが、宣伝的效果以外の価値はないであらう。嘗てある講演会に於て、講演者が土壌と云ふ語を繰返して云つたところ、これを聞いた農夫が之を泥鰌と解したと云ふつまらない笑ひ話があつて、この罪は漢字に帰せられたが、之と同じ様な話が英国にもあつて、ある牧師が *felicity* (幸福、平俗に云へば *happiness* である)と云つたところが、これを聞いた農夫が豚の腹の中にあるものと云つたと云ふ話がある(イエス・ペルセン「英語の生長と構造」須田、真鍋訳、尙同書には此種の例が多挙挙げられてゐる)。かう云ふ事は何処の国にもある事である。それが我國だとすべて漢字の罪にされるのは正しい事ではない。

以上色々漢字廃止論の悪口を云つてしまつたが、これは決して私が日本語に欠点がないと思つてゐると云ふ事ではない。漢字の学習が或程度迄吾々の負担になつてゐる事は事実であらう。しかし所謂角をためて牛を殺す様な事があつてはならない。漢字廃止論には漢字を憎む感情が余りに強すぎる様であり、又表音文字に対する盲信も亦然りである。公平な立場から見ると、漢字は日本語の外部にある異物でなくて、既に内部に遣入りこんで来て、血となり肉となつてしまつたものである。この功罪はしばらく措き、この現状の認識の上に立たない議論はすべて空論である。そしてその空論たるや、右の様に、論拠甚だ薄弱である。しかもそれが時の大勢、特にインテリと云はれる人々を指導してゐる様に見える。これは正しい事ではない。漢字の問題は充分に色々な面から研究して、公平な結論に達しなければならぬのである。